數千のマケドニア兵全部に、それぞれ結婚記念品の贈り物をした。これをヨーロッパとアジアの結婚と呼ぶのである。「兩大陸は合法な婚姻と、共同の子孫によつて結合されることとなつた。」かうプルタークは書いてゐる。

さて次ぎにアレクサンドルはペルシア人やその北方のバルチア人、バクトリア人、その他からの徴募兵に、マケドニアの方陣や騎兵隊の訓練を施しはじめた。これまたヨーロッパとアジアを同化せしめるためであつたか、それともマケドニア兵に頼らずとも濟むやうにするためであつたか、兎に角、マケドニア兵は、その後者と考へて、彼に反對した。そこで彼がかれ等を改悛させ、ペルシア人と饗宴を共にする氣にさせるには、並大抵の苦勞ではなかつた。この場合歴史家は、アレクサンドルが一大長辯舌を揮つたことにしてゐるが、實は彼がマケドニア兵に引上げを命じたのであつて、しかもその時、彼がどうしてかれ等に、このペルシアから歸國せよと言ひ出したかについては、何の素振りも見せなかつた。かれ等は狼狽驚愕すること三日の後、彼に屈服して、その寛恕を求めた。

ここにまた、極めて興味深い議題がある。アレクサンドルは事實人類の融合を計つてゐたのであるか。或はまた東洋の君主の華やかな、神のやうな威嚴さが好きになつて、單に一指導者たる王にすぎないヨーロッパから抜け出さうとしたためであつたか。アレクサンドル時代の、また當代からあまり遠くない時分の著述家は、二つの中で後者の說に傾いてゐる。かれ等はアレクサンドルの限りない虚榮心を强調してゐる。かれ等はアレクサンドルが、ペルシア王の衣や冠をつけはじめた次第を述べて、「はじめは夷狄の前や、私的の場合に用ゐたにすぎなかつたが、それが後には、國務のために王座につくべき公の場合にも、これを着けるやうになつたと言つてゐる。彼は間もなく東洋風の跪坐低身の禮を女人等に要求しはじめた。

次ぎの一事は、アレクサンドルに容姿上の虚榮心があつたといふ臆測を裏書するものである。彼の肖像は屢々繪や彫刻に描かれたが、その肖像はいづれも極まつて、廣い額から美事な髮を後に靡かせた美青年として現はれてる。これまで大抵の人は鬚を蓄へてゐたが、アレクサンドルは自分の若々しさ、美しさが得意で、それを失ふことを恐れた。彼は三十二歳で、尙ほ少年に見せかけるために、いつも顏を剃つてゐた。これがその後ギリシアやイタリアで、幾世紀もの間うち續いた流行の魁となつたのである。

アレクサンドルの晩年の兇暴と虚榮についての數多い物語は、彼への思ひ出の周りに密集してゐる。彼は自分の最も信頼してゐる忠實な將軍パルメニオ Parmenio の息子フィロタス Philotas についての噂話を聽きつけた。それはフィロタスが、自分の愛してゐるある婦人に向つて、アレクサンドルは子供に過ぎないとか、もし自分の父が、自分のやうな者がゐなかつたら、ペルシア征服も何もあつたものではなかつたとか言つて、自慢したといふのである。この斷言にも一面の眞理はあつた。この婦人はアレクサンドルの前に引出されて、

一々聽きただされた。フィロタスはすぐに陰謀の罪名を著せられて、不充分な證據の下に拷問にかけられ、遂に死刑に處せられた。その時アレクサンドルは、自分のために二人の息子をすでに戰場で失つたパルメニオ將軍のことを考へた。しかもその揚句は、この老將が息子の死を聽きつけないうちに、彼を暗殺させるため、急使を派遣したのだ。このパルメニオ將軍こそ、父フィリップ王の最も信頼の厚かつた忠臣であり、またフィリップの變死の前に、すでにマケドニア軍を率ゐてアジアに渡つた武將であつたのである。

この話の内容の眞實については、何等疑ひはない。同じやうに、アリストートルの甥カリステネス Callisthenes の死刑の話も、また眞實である。カリステネスは、アレクサンドルの帝王神權を否認して、恰も僭主政を轉覆してしまつたかのやうに、得意になつて濶歩し、他方青年たちからは、數千人中の唯一人の自由人として尊敬されてゐた人物であつた。

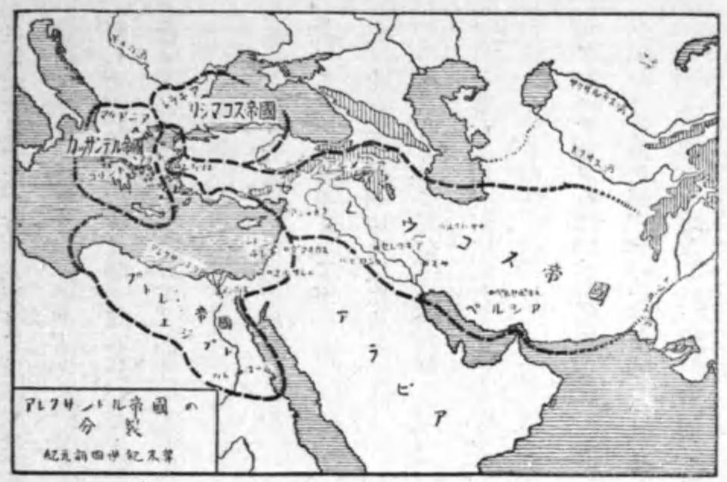
かういふ事件の裡に、われわれはアレクサンドルが酒の上の喧嘩からクリツス Clitus を殺害したといふ事實の極めて明白な物語をも知つてゐる。ある時、この王とその仲間たちが、大酒を飲んでゐた。醉が廻るにつれて話も聲高に、大つぴらになつて來た。そこには、この「若い神の子」に對する多くの諂ひと、フィリップ先王の誹謗とが並べたてられた。そしてアレクサンドルは滿足さうな微笑を洩らしながら聞いてゐた。

この醉つぱらひの自己滿足は、マケドニア人には耐へられなかつた。それはアレクサンドルの乳兄弟クリツスを逆上させた。彼はメディア風の服裝をしたアレクサンドルを非難して、反對にフィリップを褒め立てた。聲高な論爭がはじまつた。クリツスの友人たちは、この場の始末をつけさせようとして、クリツスを室外へ押出した。しかし、彼は醉つぱらひが示す例の執拗さで、また別の入口に戻つて來た。部屋の中では、外に立つたクリツスが、エウリピデスからの一節を、大膽な、不遜な調子で叫んでゐるのが聞かれた——

これがそも御身たちのならはしか
これがそもギリシアが
その戰士に酬ゆる道なるか
萬人によつて贏ち得た戰利を
そも一人の者が主張してよいものか

アレクサンドルは突然親衛兵の鎗を奪ひ取つた。さうとも知らぬクリツスは室内にはひらうとして、帳(とばり)をかかげた。その刹那、彼の身體は刺し貫かれた……

人々はこのやうなことが、この若い征服者の生活の眞實の雰圍氣であつたと信ぜざるを得ないのである。そ



れゆゑまた、ヘファエスティオン Hephaestion の死に對して彼が示した狂的な、そして殘虐な哀悼の話も、すべてがすべて虛構であるとは言ひ得ない、もしもこの話が眞實ならば、否、その一部でもほんたうなものなら、それは平衡を失した、一切合切何でも自分の事柄にかかづらしてしまふ心の狀態を示すものである。こんな心にとつては、帝國といふのも單なる自我發現のための機會以上の何物でもない。世界に存するありとあらゆる資源も、ただ一人の者のびつくり仰天した賞嘆讃美を、無理にも得ようとして、千萬人を犧牲にするといふやうな種類の、氣まぐれな氣前好さのための材料にすぎないであらう。

さて、ヘファエスティオンは病氣だつたので、嚴重な食養生を命ぜられてゐた。偶〻醫者が芝居に出掛けた留守中、彼はこれ幸ひと燒鳥を一皿食べて、その上氷で冷やした酒を一壜飲んだ。そしてこれがもとで、たうとう死んでしまつた。アレクサンドルは哀悼の意を表することにきめたが、その哀悼たるや、まさに狂者のそれであつた。彼はその醫者を磔刑に處した。それのみならず、ペルシア中の馬と騾馬の毛を剪み切り、そして近隣諸都市の銃眼附胸壁を取壞すことを命じた。それから長期間その陣營に於ける音樂を禁じ、またクザエア人のある村落を定めて、そこの青年を全部ヘファエスティオンの靈魂に對する犧牲として虐殺した。最後に彼は、墓標を作るために、一萬タレントを下らない金額を計上したのである。この金額は當時にあつては、莫大なものであつた。もちろん、これ等のどれもが、ヘファエスティオンに對する眞の敬弔とはならなかつた。しかしただ、アレクサンドルの悲嘆の物凄さを、畏怖した世界に示す上にのみ役立つた。

この最後の話や、その他いくつかのこれに類する話は、多分嘘か、歪曲か、誇張かであらう。しかし、そこには何か一脈の相通ずるものがある。アレクサンドルはバビロンで一しきりの痛飲を重ねた揚句、突然高熱に襲はれて（紀元前三二三年）病みついた。そしてたうとう斃れてしまつた。彼はまだ僅に三十三歳であつた。彼が奪つて已が手に握つてゐた世界帝國は、丁度子供が奪ひ取つて手に握つてゐた貴重な花瓶のやうに、立ちどころに地に落ちてこなごなに碎けてしまつた。

人々の想像の上にどんな形の世界秩序がひらめいたとしても、それは彼の死とともに消滅した。話はこれから野蠻な、紊亂した專制政治の物語となるのである。到るところで地方の支配者たちが獨立をする。アレクサ

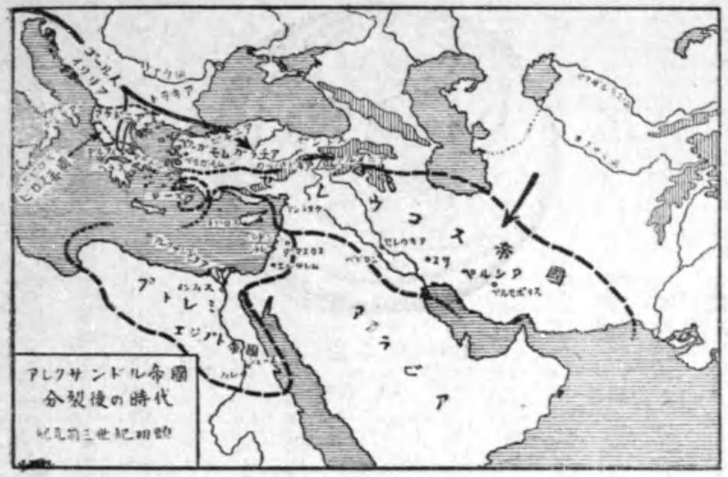
ンドルの全家族は、その後數年のうちに殺害されてしまつた。アレクサンドルの野蠻人の妻ロクサナは、かの女の競爭者であつたダリウスの娘を卽座に殺してしまつた。そしてかの女自身は間もなくアレクサンドルの遺兒を產み落した。この兒もまたアレクサンドルと名付けられたが、その二三年後（紀元前三一一年）には、母子ともに殺害されてしまつた。アレクサンドルのもう一人の、今はただ一人となつた息子ヘルクレス Hercules もまた殺された。低能な腹違ひの弟アリデウスもまた同じ運命に會つた。プルタークは、マケドニアで暫くの間權力を握つてゐたオリムピアスに、最後の一瞥を與へてゐるが、それによれば、かの女は誰彼の別なく、自分の驚嘆すべき息子を毒殺したといふ罪を着せ廻はして、憤怒のあまり多人數を殺害した。それどころか、かの女はアレクサンドルの周圍の人々で、彼の歿後に死んだ人々の死骸を掘出させた。しかし、このやうな發掘によつて、アレクサンドルの死因にどんな新光明が投げられたか、そこまではわれわれは知らない。だが、たうとうオリムピアスは、嘗てかの女が殺した人々の一味の手によつて、マケドニアに於て殺された。

六　アレクサンドルの後繼者たち

罪惡の混亂の中から、程なく三人の主要人物が登場した。舊ペルシア帝國の大部分、東はインダス河から西はリディアに到るまで、將軍セレウコス Seleucus の支配するところとなつて、玆にセレウコス王朝が創立された。マケドニアは將軍アンティゴヌス Antigonus の手に落ちた。そして第三のマケドニア人プトレミー Ptolemy は、エジプトを確保して、アレクサンドリアを首都としたが、優秀な海軍力を建設するに至つて、キプロスや、フェニキアや、小アジア沿岸の大部分を保有した。

セレウコス一世
古ギリシア銀貨

プトレミー、セレウコス兩帝國は、可なり長い間續いたが、小アジアとバルカン諸國の政治形態は、もつと不安定なものであつた。紀元前三世紀の政治區劃が萬華鏡的性質を持つてゐることを、二つの地圖が讀者に示すであらう。アンティゴヌスはイプソスの戰（紀元前三〇一年）で敗れて戰死した後を受けて、トラキアの統治者リシマクス Lysimachus とマケドニア・ギリシアの統治者カツサンデル Cassander が同時に一時的後繼者となつた。群小の統治者たちは各小國を開拓した。する中に蠻族が西方から、また東方から、この崩壞し亡頽した文化世界に侵入した。西方からはケルト人と密接な關係のあるゴール人がやつて來た。かれ等はマケドニアとギリシアを通つて、デルフィを襲擊（紀元年二七九年）して來た。その二隊はボスフォルスを經て小アジアに進み、最初は傭兵として働いたが、後には獨立した掠奪軍を組織して、殆んどタウルス近くまで襲擊した後、



舊フィリジア人の土地に定着し、人民から貢物を徵收した。（これらフィリジアのゴール人は、聖パウロの使徒書にいふところのガラテア人である。）アルメニア及び黑海南岸は、支配者の變遷によつて混亂した。カッパドキア、ポントス（黑海の南岸）ビニシア、ペルガモンには、ギリシア思想を有する諸王が現はれた。東部からはスキチア人、パルチア人、バクトリア人がまた南進した。ギリシア人が統治したバクトリア諸國は、一時東洋化への傾向を示した。紀元前二世紀には、ギリシアの冒險家たちは、バクトリアから北インドを襲つて、短命な諸王國を建設した。

これがギリシア最後の東方飛躍である。その後再び蠻族が黑幕のやうに、西方文化とインドを遮つた。

七　文化の隱れ家ペルガモン

ギリシア帝國のこれら泡の裂けた斷片の眞中に、少くともこれがために短い一節を割かなければならぬペルガモン王國 Pergamum なる一小國が存在する。

この都市が獨立中心地として最初に語られるのは、イプソスの戰で終熄した鬪爭の時代であつた。紀元前二七七年と二四一年の間に、ゴール人侵入の趨勢が、小アジア一帶の所々に渦卷き泡立つてゐる間、ペルガモンは一時ゴール人に貢を納めたが、概してその獨立を維持してゐた。それがアッタロス一世 Attalus の下に朝貢を拒絕して、二つの決戰でゴール人を破るに至つた。それより（紀元前一三三年まで）一世紀あまりの間、ペルガモンは自由を確保した。恐らく當時世界最高の文化國であつた。アクロポリスと呼ばれる市內最高地の丘の上には、宮殿や、寺院や、博物館や、圖書館などの多くの建築物——後述するアレクサンドリアのそれらに匹敵する世界最初のものが建つてゐた。ペルガモン諸侯の下にギリシア藝術は新たに花咲き、ゼウス神殿の祭壇の浮彫や、戰ふゴール人、頻死のゴール人等の彫像は、いづれもこの地でつくられたものであり、人類の藝術的至寶の一つである。

その後間もなく後述のやうに東方地中海に新たな强國が、その勢力を示すやうになつた。卽ち、ギリシア、並にギリシア文化と親密な關係にあるローマ共和國、これである。そしてこの强國の中にペルガモン、ローデス Rhodes 等のギリシア都市國家は、ガラテア人、並に東洋化したセレウコス帝國に對抗するための自然にして有力な同盟國と協力國を見出したのである。

やがてローマの威力はアジアに侵入した。そして遂にマグネシアの戰（紀元前一九〇年）でセレウコス帝國を破つて、これを小アジアからタウルス山脈の外に追出した。紀元前一三三年にはペルガモンの最後の王たるアッタロス三世が、遂に避けがたい運命に屈服して、ローマ共和國を彼の王國の後嗣と定めた。それ以來、ペルガモンはローマ共和國の一州「アジア州」となるのである。

八　世界統一の先驅者としてのアレクサンドル

歴史家といふ歴史家は言ひ合せたやうに、アレクサンドル大王の經歴を以て、人事に一時期を劃するものと見做さうとしてゐる。實に彼の生涯は、西方地中海を除いて、當時既知の全世界を、一篇の劇に仕組んだものであつた。

しかしながら、アレクサンドル大王自身についてかれ等が抱いてゐる意見は、人によつて非常に相違してゐる。これを大別すれば、大體二派に分けることが出來る。一方の型の史家は、この若者の年の若さと、その華やかさに魅せられる方である。かうしたアレクサンドル崇拜者は、アレクサンドル自身の評價によつて、彼を見ようとしてゐるやうに思はれる。即ち、彼の罪科惡行は、すべて彼の豐かな天性のほとばしりであるとか、何等か偉大な計畫のためには、已むを得ない必要であるとか考へて、これを宥恕しようとする。そして彼の生涯は一つの設計、即ち一つの爲政者の計畫――後代のより廣範圍の知識と、より廣大な思考を以てして、辛うじてわれわれの理解裡にはひつて來るやうな計畫の上に組立てられたものと見做さうとする。しかるにまた他方アレクサンドルを以て、自由な、そして靜謐な、ギリシア化された世界の徐々に成熟して行く可能性を、破壞し去つた者と見る一派がある。

アレクサンドルや、或は、その父フィリアプに擬するに、今日の第二十世紀の歴史哲學者たちが是認するやうな世界政策の計畫を以てする前に、われわれは當時の人々が有し得た知識及び思想の限界を、特に注意して考察して置く必要がある。プラトーや、イソクラテスや、アリストートルなどの世界は、實際歴史的な透視畫法を全然有しなかつた。最近二世紀前までは、この世に歴史といふやうなもの――すなはち單なる坊主臭い年代記から區別される歴史はなかつたのである。相當の教育ある人ですら、地理や、諸外國のことについては、極めて局限された觀念しか有つてゐなかつた。大抵の人にとつては、世界はまだ平たくて、そして無限なものであつた。唯一つの體系だつた政治哲學も、極小さな都市國家の經驗に基づいたものであつて、帝國といふ考は全然なかつた。そして何人も文化の起源について、知るところがなかつた。アレクサンドル以前に、經濟のことについて思索をめぐらした人もゐなかつた。一社會階級の他の社會階級に對する反動といふものを論じた者もなかつた。

實のところ、われわれは兎角アレクサンドルの生涯を以て、ずつと以前より行はれ來つた何等かの過程の絶頂、漸次强晉の最高度と考へる傾きがある。ある意味に於ては、もちろんさうであつた。だが、それは終末ではなく、むしろ發端であつたと見る方が、より眞實である。それは實にすべての人事を一にすることが出來ることを示した人間の想像に對する最初の示現であつた。

彼の時代以前のギリシア思想の達しうる限界は、ペルシア帝國をギリシア化するといふこと、即ち、マケドニア人、及びギリシア人のこの世界に於ける君臨といふことであつた。ところが、アレクサンドルが歿する前となつては、況して彼の死歿後、彼の事に思ひをめぐらす時代となつてはもちろんのこと、世界法、及び世界組織といふ觀念は、人々の頭惱にとつて實現の可能性を有つた。そして容易に同意しうる想念となつた。

幾代もの間、アレクサンドル大王は、人類にとつて世界秩序、世界支配の象徴であり、權化であつた。彼は傳說的な人物となつた。半神のヘルクレス、或はアモン・ラー神の神々しい象徴を飾りつけた彼の頭は、彼の後繼者の中で、彼の相續人と主張する人々の用ゐた貨幣に現はれてゐる。次ぎに世界支配の觀念は、もう一つの大民族、數世紀間に亘つて驚くべき政治的天才なることを示したローマ人によつて着手された。そして玆に一人の光彩陸離たる冒險兒ケーザルは、舊世界の西半部に於ては、アレクサンドルの光彩を奪つてしまつたのである。

かうして紀元前三世紀の當初に、舊世界の西方文化の中には、當代人の心を支配する三つの大なる建設的思念が興つた。文書や知識は舊世界の僧族の奇蹟や、密儀や、入聖式から脫出して、普遍的知識の理念が發達して來た。そして歷史と哲學が一般に了解され、且つ傳へられた。最初の偉大なる理念卽ち科學思想の、典型的な代表者は、ヘロドトスとアリストートルであつた——科學なる言葉を、玆では最も廣義に、最も普通な意味に用ゐる。それは歷史を包含して、周圍の事物に關する人間の明確な目視を意味する科學である。バビロニア人や、ユダヤ人や、セム民族の間に、宗敎は普遍化した。それは寺院や聖地に於ける地方神、乃至部族神の暗い禮拜から、全世界を寺院とする普遍的な正義の神の明るい奉仕へと進んだ。そして遂に、世界政策の理想の最初の萌芽が芽生へた。世界大文化史は、今ここまで文化進展の跡を辿つて來たのである。

この後の人類史は、大まかに言へば、科學や、普遍化された正義や、人類の幸福に關するこの三大思想の歷史である。それはかうした思想を最初に生み出した稀有な、特別な人々や國民の頭腦からひろがつて、やがて人類の一般的意識となる時、先づ新たな色彩を、次いで新たな精神を、そして遂には人間界に新たな方向を與へつつ展開して行くであらう。

第二十三章　アレクサンドリアの科學と宗教

一　アレクサンドリアの科學

短命に分裂したアレクサンドル帝國の中で、最も繁榮を極めた國は、曩にフイリップ王が放逐した處のアレクサンドルの部將の一人、プトレミーが手中に收めたエジプトであつた。エジプトはゴール人やバルチア人の掠奪から遁れるだけの安全な距離にあつた。加ふるにチレ市とフェニキア海軍が潰滅して、アレクサンドリア市が建設されたことは、エジプトをして一時東地中海に於ける海上權を掌握せしめるに至つた。する中にアレクサンドリアはカルタゴと匹敵するまでに繁榮を遂げた。東は紅海を越えてアラビアやインドと貿易を營み、西はカルタゴ人と海運上の競爭をした。かうしてアレクサンドリアの商業權は、幾世紀も永續する運命にあつた。しかもやがてローマ帝政下にあつては、最大の發達を遂げることとなるのである。

エジプト人はその獨立を失つて以來、プトレミー王朝のマケドニア・ギリシア人の統治にこれまで知らなかつたほどの同情的な、寛容な政治を感じた。事實はマケドニア人がエジプトを統治したのではなくて、むしろエジプト人がプトレミー王朝を征服し、且つ同化したのである。

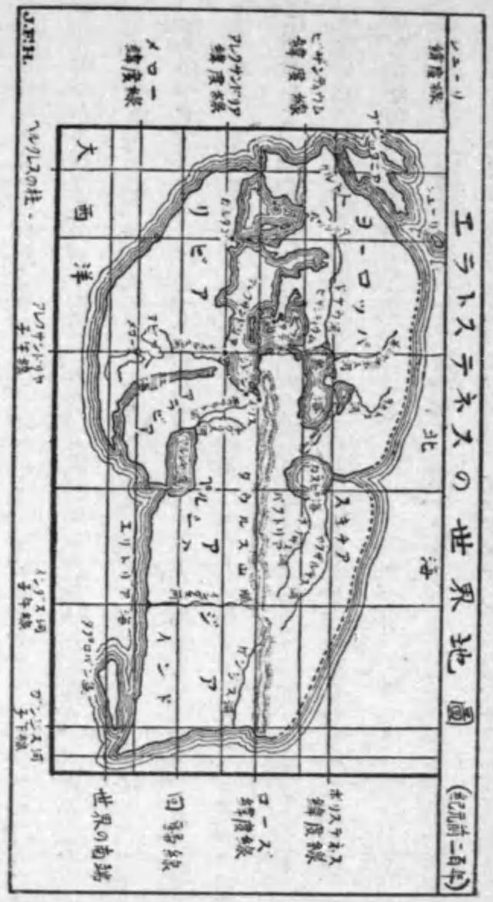
かうしてエジプトのギリシア化を企てた政治は、却つてエジプト式の政治觀念に歸つた。プトレミーは神人王、ファラオとなり、その內閣はベビや、トトメスや、ラムセスや、ネコの古い傳統を繼承した。しかしアレクサンドリアの市政は、ファラオの神性統治下にありながら、尙且つギリシア都市型の機構を具へてゐた。その宮廷及び內閣の用語はアッチカ・ギリシア語を用ゐた。その結果、ギリシア語はエジプトの知識階級の日常語となり、ユダヤ人社會はヘブライ語を理解し得ない人々を多數に生ずるに至つて、聖書のギリシア語譯の必要が起つた。アッチカ・ギリシア語はキリストの前後數世紀の間、アドリア海からペルシア灣に亘る全知識人の用語とはなつた。

科學的精神はアリストートルがマケドニアのフィリップ王の宮廷に鼓吹したものであるが、アレクサンドルの部將中でこの思想に最もよく通達したものは、プトレミーであつた。プトレミーは創造的で謙讓な上に、異常な知的才能に富み、アレクサンドルの心中にひそむオリムピアスの血統に皮肉な理解を持つてゐた。その著述たるアレクサンドル戰史は旣に湮滅してゐるが、今日殘存する文獻の全部は、この書から資料を得たものである。

彼がアレクサンドリアに建設した博物館は、事實上世界最初の大學である。アテネのアリストートル學派の

學校の場合もさうであるが、博物館 Museum はその名の示す通り、ミューズの神 Muse に奉獻したものである。尤もそれは形の上のみの宗教的建造物であつて、實は非宗教人の知的探求を考へることの出來なかつた當代にあつては、合法的な資金獲得を果たすためのものであり、主として研究と記録に精進しながら、ある程度の教育にも携はる學者の研究所である。この當初から五六十年間、この博物館は、アテネの最盛時すら匹敵し得ないほどの光彩を放つた。殊に數學と地理學は、その尤たるものであつた。學生に馴染の深い幾何學のエウクリッド Euclid、地球の大きさを測定して、眞の直徑とは五十マイルとは違はないまでに計算したエラトステネス Eratosthenes、圓錐曲線學を書いたアポロニオス Apollonius、かうした人々が現はれた。またヒッパルコス Hipparchus は天界の現象を記錄する目的を以て、星の圖表と天體圖を書いた。ヘロン Heron は最初の蒸氣機關を工案した。アルキメデス Archimedes はアレクサンドリアに遊學した人で、その後も度々博物館と交通した。ヘロフィロス Herophilus は最も偉大な解剖學者で、活體解剖を行つた。このヘロフィロスに反對した他の學者たちは、解剖學の研究を嫌厭して、藥學の發達に努力した。

しかし、アレクサンドアのかうした科學的閃光も、一世紀とは續かなかつた。博物館の組織に、精神的團體としての意圖を缺いてゐたからである。博物館は王立大學であり、教授も校友もファラオから任命され、且つ支給されてゐた。アテネの學校や大學は私立であるために、その點遙かに安定性と獨立性があつた。プトレミー一世や二世の間は、王室の保護はよく屆いてゐたが、王統が衰微して、エジプト僧族の傳統がプトレミー家を呑むに及んで、アリストートルの博物館的精神は滯滅した。博物館はかうして存續百年ならずして、科學的精力を根絶した。



博物館と並んでプトレミー一世の名を不朽たらしめたものは、大圖書館の建設である。これは國立圖書館と國立出版所の前代未聞の大規模の結合で、百科全書的な知識の寶庫を作らうとしたものである。若し異邦人がエジプトに未知の書を持ち込まうとするならば、その寫本を圖書館に納めなければならない。そこで多勢の寫字係が絶えず複寫を取つてゐた。ここにはまた大學の出版部のやうに、外國に本を賣り出す營

業部があつた。圖書館長カリマコス Callimachus の下に、プトレミー二世と三世の時、藏書を整理して、系統的な目錄を作成した。

當時の書物は何頁かを綴つたものではなくて、今日の自働ピアノの樂譜のやうに卷いたものであつた。從つて書中のある箇所を引用するためには、卷物を一々卷きひろげたり、卷き戻したりする手數がかかるのみでなく、書物も傷めば、讀む人も疲れてしまふことになる。何かちよつとした道具でもあつて、引用する時前後に卷きかへす工夫でもしてあつたかと思ふと、さうした形跡もない。卷物は讀まれるたびに、汗ばんだ兩手で取扱はれる。そこでかうした時間と勞力の節減のために、カリマコスはヘロドトスの歷史のやうな大作を何卷かに切斷して、數冊にわけた。これが今日第何卷と呼ぶ語原である。圖書館は博物館を遙かに凌ぐ多數の學生を吸收した。世界各地から殺到する來館者を宿泊させたり、賄をしたりするために、アレクサンドリアの市民は可なりな利益を得た。

知的生活上の設備の進步は、當時極めて遲々たるものであつた。今著者が仕事をしてゐる英國中流家庭の世間並の書齋の設備に引きくらべて、アレクサンドリアの學者は、どんなに不便と困難を感じたことであらう。圖書館の全盛期たるその何世紀かの間、かれ等は莫大なる時間と、勞力を浪費しなければならなかつた。著者の前には今、半ダースの書物がある。その中の三冊には、親切な索引が附いてゐる。わたしは六冊のどれでも必要なところを手早く照らし合せ、引用句を確めて書續けることが出來る。これを厄介なかの卷物に比べるならどうであらう。手近に二冊の百科全書と、一冊づつの辭書と、世界地圖と、傳記辭書と、あと數冊の參考書がある。これらには欄外の索引はない。それは是非もない。それは今日注文する方が無理である。兎に角、紀元前三〇〇年にはかうした資源はない。アレクサンドリアでは先づ文法書と辭書から拵らへてかからなければならなかつた。この本に例を引くならば、原稿が出來ると、タイピストがそれを正確に印書する。そこで讀みかへしが樂になつて、十分推敲することが出來る。章句の配置替は自由であり、再印書も、再修正も意のままである。それにアレクサンドリアの學者は、自分の書いた一語一語を口授するか、寫し直すかもしなければならない。一度書き上げた箇所に戻らうとするには、今書いたところを、空氣中に搖ぶるか、砂をその上に撒くかして、乾かさなければならない。なぜなら、當時は吸取紙さへなかつたからである。著者の書いたものが多數の讀者の手に渡るためには、幾度も寫本をしなければならないし、その都度寫誤りが出來ることになる。新らしい本を書き上げると、それが部屋中一杯の寫字生の前で讀み上げられる。ここで少くとも二三百部の第一版が出來る。ローマでは、ホラティウスやヴェルギリウスは、相當部數の發行を見たものである。地圖や圖表を要する場合は、極めて面倒なことになる。例へば、解剖學のやうな精確な挿繪を要するものは、寫字生の技倆次第でひどい打擊を受ける。地理學の著者には、これまた人知らぬ困難がこの點にあつたことであらう。

もちろん、紀元一九二五年の一私人の書齋や机が、不便極まるものとして嗤はれる時が、今に來るかも知れない。しかし、これをアレクサンドリアの標準を以て測るなら、驚くべき迅速であり、能率であり、神經的精力の經濟化である。

アレクサンドリアでは印刷術は遂に起らなかつた。これは事實意外なことである。世界は書物に渇望してゐた。むしろ書物のみではない。通知や、布告や、その他の公事上の必要が急であつた。しかも西洋文化史上には、第十五世紀までは印刷術なるものがない。抑〻印刷術は奥妙の技術でもなければ、先驅的、準備的發見を必要とするものでもない。それは最もわかりきつた技術である。その原理は常に知られてゐた。マグダレーヌ期の古石器時代すら、革の衣裳に模樣を印刷した形跡がある。古代スメルの玉璽もまた印刷術である。貨幣も印刷である。いつの時代にも無筆の人は署

名の代りに木や金屬の刻印を用ゐた。例へば、英國の征服王、ノルマン人のウィリアム一世は、かうした刻印にインキを附けて、文書の署名に代へた。支那では、第二世紀に古典が印刷された。それにも拘らず、インキか、紙か、書物の形かが邪魔をしたためであつたか、それとも寫生奴隷の所有者階級が、この職業の保護を主張したためであつたか、それとも文字が漢字やゴシック文字よりも迅速容易に書くことが出來たので、それ以上容易く書く必要がなかつたためであつたか、或はまた、思想家、學者と、技術家との間に社會組織上の間隙があつたためであつたか、兎に角印刷術は興らなかつた——挿繪を精確に複寫するに當つてすら、さうであつた。

印刷術が發達するに至らなかつた主要な原因は、要するに質の均等な、手頃な形の印刷資料を豐富に供給せられなかつたためである。パピルスの供給は極めて少量であつたし、小片を幾つも繼合はす必要があつたり、紙の形にも大きさの標準がなかつた。紙にヨーロッパ人がはじめて接したのは、支那から輸入されたためであつた。パピルスの卷紙はこんな風に遲々たる出來方であつたから、たとへ印刷機が發明されたとしても、機械は手を束ねて横はつてゐたことであらう。ただ挿繪や圖表の印刷に版木を用ゐなかつたことは、所詮不可解である。

アレクサンドリアが異常な知的凱歌を奏したことは、エラトステネスにその一例を見ることが出來る。彼は

その裝置の貧弱を暫く措くならば、ニュートンや、パスツールに比すべき人物である。それにも拘らず、アレクサンドリアの科學が、政治や、生活や、庶民の思想の上に影響を與へなかつた所以は、かうした障害に依るものである。その圖書館や、博物館は、光明の中心であつた。しかしそれは一般世界から隱れたほの暗い提灯の火であつた。その研究の結果を海外の篤學者に傳へるにしても、退屈な手紙の通信に依るほかはなかつた。一般人にひろく普及させる方法に至つては絶無である。他に知識を吸收する方法がなかつたから、學生は莫大な費用をかけて、この熱鬧の都市に遊學しなければならなかつた。アテネや、アレクサンドリアには、いろいろな品質で出來てゐる寫本を、高い値で賣つてゐる本屋があつた。しかし多數の人々に、また他の都市まで、教育を普及させようとすると、忽ちパピルスの供給不足を生じて來る。教育は大衆に到達する機會がない。淺薄な教育以上のものを求めようとする人は、當時の型にはまつた生活を放擲して、この町に來なければならない。そして設備のよくない、過勞に墮つてゐる學者の家の周りをうろつきながら、長年の生活を續けなければならない。學問をするためには僧侶の入門ほどに日常生活から完全に隱遁する必要はなかつた。しかしそれでも尙ほそれに近いものがあつたのである。

感情の自由、言論の潤達と直截、それらは眞の知的生活の生命力であるが、それがアレクサンドリアから極めて迅速に消えてしまつた。プトレミー一世の保護時代からさへ、政治上の論議は禁じられてゐた。やがて各學派の對立が、學問の中にまで庶民の迷信と偏見を導入するに至つた。

慧智はアレクサンドリアから逃げ去つて、その後に衒學を殘した。書物の利用が書物の崇拜に代つた。學者は忽ち不快な學者臭を帶びた不思議な特殊階級となつた。博物館が出來てから百年とも經たぬ中に、アレクサンドリアにはあたらしい型の人間が充滿した。內氣で、偏屈で、迂遠で、物のわかりが惡くて、些事に拘泥して、仲間にも、仲間以外にも嫉妬深い人間――これが學者である。祭壇は持たないが、僧侶同樣に不寬容で、洞穴には棲まないが、魔法づかひ同樣に文化の進步を妨げる。彼に取つては、どんな寫本の仕事も面倒とは思はないし、どんな珍本を手に入れても、飽くことを知らずにもつと書物を漁らうとする。所詮人間の知的過程の一種の副產物である。しかもこの副產物のためにばかり、漸く燃えはじめた人智の炬火は、貴重な幾世代かの長い間を、空しく埋められなければならかつた。

二　アレクサンドリアの哲學

アレクサンドリアの精神的活動は、始め博物館に集中されて、主として科學的なものであつた。哲學はその興隆時代には、自我と物質世界を支配する威力の學說であつた。それがこの主張を棄てることなしに、事實上祕かな慰安の學說となつた。昂奮劑は魔睡劑と變じたのである。哲學は、自分も世界の一部であるのに、その

世界を放棄した。そして世界は幻想であるといふことや、世界の外と世界の上で、眞髓の崇高なるものが自分の身内にあるといふことを、美しい精巧な言葉で言つて、自ら慰めてゐた。アテネは政治的には意義を失つたが、紀元第四世紀中は、尙ほ熱鬧の大市場で、外見上はその衰頽がわからなかつた。そして戰爭好きな諸强國や冒險家たちから、半ば侮蔑的な不思議な敬意を以て眺められた。そこでかうした哲學的教育の中心地としては適してゐた。それから二世紀を過ぎた頃、アレクサンドリアの諸學派は、哲學上の研究で同じやうな重要の地位を贏ち得た。

三　宗教製造所

後に顯著な哲學を發達させたこの都市も、始めは宗教思想の大製造場であり、また交換所であつた。博物館と圖書館は三面都市アレクサンドリアの一面を代表するものであつた。三面とはアリストートル系の要素、ギリシア風の要素、及びマケドニア式の要素である。しかしプトレミー一世はこの風變りな都市に、もう二つの要素を結附けた。第一はここに多數のユダヤ人が集合したことである。その一部はパレスチナから來たが、大部分はエジプトのユダヤ人殖民地から集合した。その殖民地にはエルサレムに歸らないユダヤ人が住んでゐた。かれ等はユダヤの離散族と言はれ、バビロニアの幽囚に加はらなかつたユダヤ人の一種族である。ただそれにも拘らず、かれ等は聖書を持つてゐたし、世界中の同信者と親密な通信を交換してゐた。このユダヤ人はアレクサンドリアのユダヤ人區で人口が甚しく繁殖した。そこでこの町は世界の最大ユダヤ人町となつた。事實それはエルサレムを凌ぐ人口となつてゐた。かれ等が聖書をギリシヤ語に飜譯する必要があつたことは、前に述べた。もちろんまた、このアレクサンドリアには土人のエジプト人も多數住んでゐて、その大部分はギリシア語を話した。ただかれの胸の奥には、悠久四千年の寺院宗教や、寺院特種の傳統が流れてゐた。アレクサンドリアには三種の精神系統が融合してゐる。卽ち白人種の三大民族型である。

イシス神とホルス神

アリアン系ギリシア人の頭腦明晰な批評的精神。セム系ユダヤ人の道德的熱情と一神教的精神。それにハム系エジプト人の神祕と犧牲の古い傳統的精神。ギリシアではこれを祕密な儀式として、また靈感的な修法として認められてゐたが、エジプトでは日中大寺院の中で堂々と行はれた。

アレクサンドリアではかうした恒久的な三要素が混合した。尙ほまた港や、市場では、あらゆる各人種が混じ合ひ、さまざまな宗教思想や慣習が肩を並べたはずである。紀元前三世紀に、インドのアソカ王の宮廷から

佛教の布教師が渡來した。後ではインド商人殖民地も出現した。

アリストートルはその政治學の中で、人の宗教的信仰は政治上の制度からその形を借りて來るもので、かれ等は神を擬人化して、神の姿を自分に似せようとするものであると言つてゐる。エジプトは專制君主の下にギリシア語を話す大帝國の時代には、單なる地方的な神や、古風な部族的氏神に甘んずることが出來なくなつた。かれ等は少くとも帝國の全領域を見守る神を求めた。そこで有力な僧族の利益のために妨げられたものを除いて、神々の合同といふ不思議な出來事が起つた。かれ等は澤山な神が、いづれも酷似してゐることを知つた。いろいろな神はあつても、所詮は一つの神が幾つもの名前を持つてゐたに過ぎなかつた。ローマのジュピター Jupiter. ギリシアのゼウス Zeus バビロニアのベル・マルヅク、エジプトのアモン Ammon ——アレクサンドルの想像的な父で、アメノフィス四世の敵なるアモン——互に似通つてゐるこれ等の神は、まつたく同一の神に過ぎない。

「萬人の父なる神、あらゆる時代
　あらゆる國々で
聖者に、野蠻人に、賢人に崇められる
　エホバ、ジョーヴ、さもなければわが主」

もし著しい相違があつたら、それは同じ一體の神の異なる面貌である。ただ、ベル・マルヅク神は今日では頽廢して僅かに假りの名に果敢ない名殘りを留めてゐる。すでに滅亡した諸國の古い神々、アッスル Assur や、ダゴン Dagon や、その他の諸神は、久しい以前に記憶から消え去つてゐた。從つて神の合同に加はらなかつた。エジプト庶民に人氣のあるオシリス神 Osiris は、すでにメムフイス寺院の聖牛なるアピス神 Apis と合體して、アモン神とも混合した。のみならず、更にセラピス Serapis の名を取つて、ギリシア化したアレクサンドリアの主宰神となつた。それがジュピター・セラピスである。エジプトの牡牛の女神ハートル Hathor 別名イシス神 Isis も人間の姿を取り、オシリス神の妻となつて、子ホールス Horus を儲け、成長したホールスはやがて再びオシリス神となる。近代人はかうした打明け話に奇異な感を抱くことであらう。しかし神の合體を計る性急な人間の慧智が、神の合理化と普通化に努める一方、尙ほ宗教的傳說や、情緒の絆や、また神々の關係などを度外視し得ない苦惱が、極めて明瞭である。

ある神の他神との合體を、多神混合崇拜 theocrasia と言つてゐる。この多神混合崇拜の最も盛んに行はれたところは、アレクサンドリアである。當時この傾向に反對したものに、二箇の民族があつた。天と地の唯一

神エホヴァを信仰したユダヤ人と、一神教太陽崇拜のペルシア人である。

プトレミー一世はアレクサンドリアに博物館を建設したばかりでなく、セラピス神殿 Serapeum の工を興して、三神合體の禮拜所とした。これは特にギリシアとエジプトの神のみの多神混合崇拜の結果である。

三神合體とは、セラピス神（オシリス神及びアピス神）イシス女神（牡牛の月神ハートル神）兒童神ホールスの三神を指すものである。他の諸神はいづれもこの三神合體神のどれかに合體してしまつた。ペルシアの太陽神ミトラス Mithras までが、かうした取扱を受けるに至つた。かうした神は、それぞれ別な神である。即ち三神である。しかし同時に一神でもある。その禮拜は甚しく熱烈なもので、今日の救世軍用がゐる太鼓のやうに、枠に鈴の附いたガラガラ樂器 sistrum を打ち鳴らして儀式を行つた。

セラピス神

かうして靈魂不滅の觀念が、宗教の中心思想となるに至つて、それがエジプトの國外にまでひろまつた。古代のアリアン人やセム人は靈魂不滅を信じなかつたし、蒙古人種もこの點には無頓着であつた。しかしエジプト人は古代から死後も尙ほ生命が永續するものとして考へてゐた。セラピス崇拜には、この思想が深く働くのである。その祈禱の文句はかうである。

「靈魂の救ひ主にして指導者、靈魂を光に導き、再び靈魂を授けたまふ大神。」

それから。

「死者を呼び起して、聖なる墓に多數の經文を埋める者に、憧れの太陽の光を示したまふ大神。」

また。

「われ等神を避けがたし。神はわれ等を救ひ、死後尙ほわれ等は神の攝理にまもらるべし。」

燈明の蠟燭を灯したり、祈禱奉獻物を捧げたり——例へば、平癒を祈るためには身體の局部の模型を奉獻したり——することは、セラピス神殿の禮拜に缺くことの出來ないものである。イシス神を崇拜する信者達は、生命を賭けて熱禱する。寺院の奥深く安置されたこの女神の神像は、頭に王冠を戴き、腕に神の子ホールスを抱いてゐる。その前には法燈が搖ぎながら燃えつづけてゐる。神殿の周圍には、蠟製の奉獻物が懸つてゐる。新入僧は長い間注意深い準備の修業をする。そして獨身生活の誓を立てる。それから頭を剃り、リンネルの法衣を着て宗門にはひることになるのである……

ホールス神は、オシリス神（セラピス神）の愛し子である。ホールス神はまた太陽神で、翼を伸ばした甲蟲

がそのシムボルである。そのうちひろげた翼は、日蝕時の太陽の白光環を象つてゐる。要するに、ホールス神はその翼で救濟を行ふところの正義の太陽とされてゐる。やがて彼は父なる神の許へ昇天する。そして父と合體して一神となる。ずつと古代には彼は父とともに罪人の調停者とされ、死者の書の中に彼のことが書かれてゐる。この死者の書は、死者の冥福を祈るために、屍體とともに埋められたものである。ホールス神の讃美歌の大部分は、その精神と語法に於て、基督教の讃美歌に似てゐる。「わが靈魂の太陽なるなんぢ救ひの神よ」といふ美しい讃美歌は、嘗てエジプトでホールス神のために歌はれた。

セラピス神の信仰は、紀元前三世紀と二世紀にひろく世界中に流布した。そして全基督教時代を通じて、その信仰上の習慣や、禮拜の形式は、ヨーロッパ中に影響を與へた。尤も基督教の本質的な觀念や、潑剌たる精神は、人類の精神史上に新時代を劃するものである。しかしこれまで基督教が繼つて來、また今日尙ほ多數の國々で繼つてゐる儀式や、象徴や、形式の法衣は、キリスト生誕前一二世紀の多神混合崇拜時代に、アレクサンドリアから全世界にひろまつたセラピス神、イシス女神の儀式や神殿の中で織られたものである。

四　アレクサンドリアとインド

アレクサンドリアの商業上と學問上の優勢な地位は、何世紀となく打ち續いた。やがてローマが勃興するに至つて、この町は世界最大の商業都市となつた。そしてローマ人のアレクサンドリア商人は、南インドに夥しい殖民地を持つた。マラバル海岸のクランガノーレには、アウグスツスに捧げた寺院が建てられ、二箇隊のローマ軍隊を以て殖民地の防備に當つた。またローマ皇帝は、南インドの諸侯に大使を送つた。初期基督教の著作家クレメントや、クリソストムや、その他の著書に、アレクサンドリアに於けるインド人とその信仰のことが書いてある。

第二十四章　佛教の興隆

一　釋　迦

アテネやアレクサンドリアの精神的及道德的活動から、また地中海諸國の人類思想の發達から眼を轉じて、これとまつたく異つたインドの知的生活を展望することは、興味のないことではない。

インド文化ははじめから自己の根の上に成長して、固有の特色を持つに至つたものである。それは西方に於ても、また東方に於ても、廣大な山脈や沙漠地帶のために文化から隔絶されてゐた。このインド半島にはひつて來たアリアン種族も、西方と北方のかれ等の種族との接觸を失つて、獨自の方向に發達して行つた。これがガンジス地方に進出するか、乃至は更に奥深く南下した種族に於ては、尙更さうであつた。かれ等はインド中にばら撒かれたドラヴィダ文化を見た。ドラヴィダ文化は、スメル文化、クリート文化、及びエジプト文化と同じやうに、すでに弘く發達してゐた新石器文化から興つたものである。嘗てギリシア人はエーゲ海文化を、セム人はスメル文化を復興し、且つ改變した。同じやうに今インド・アリアン人はドラヴィグ文化を復興し、

且つ改變した。

かうしたインド・アリアン人は、北西なる同族とは別な生活を送り始めた。氣候溫暖な土地に住む以上、牛肉や醱酵性飲料の攝取の要はない。そこで菜食を主とした。しかも豐穰な土地からは、殆んど勞せずしてかれ等の要するあらゆる食糧が得られた。もはやそれ以上の遠いところまで漂浪する必要はなくなつた。收穫と季節は確實である。のみならず、衣服や住宅も要らない。要るものがないから、交易は發達しなかつた。土地を耕したければ、いくらでも土地がある――しかもほんの少しの土地で充分である。

從つてかれ等の政治的生活は單純であり、且つ比較的安全であつた。大征服的權力は嘗てインドに起つたことがなかつた。西隣や東隣には、自然の障壁が初期の帝國主義を沮止してゐる。そして比較的平和な小村落の共和國と酋長が、國内にばらまかれてゐた。この國には海上生活がない。海賊の侵入がない。外國からの商人もない。四百年前までのインドの歷史を書くとしたら、殆んど海について記す必要がない。

幾世紀かの間、インドほど幸福な、平和な、夢みるやうな物語に富んだ國は何處にもない。羅閦 rajah (*) は狩獵に日を暮らす。生活は戀愛三昧に終始する。羅閦から身を起した摩訶羅閦 Makarajah (**) は都市を建設したり、多數の象を捕へて馴らしたり、また無數の虎を殺したりして、華やかで素晴しい大行列の傳說を、今に殘してゐる。(* インドの貴族。** 太公。)

この東洋化したアリアン族の中には、豐潤な精神生活が展開する。大叙事詩が現はれて、口寫しに傳へられる――文字がまだ發生しなかつたからである。さうかと思ふと、また深玄な哲學的瞑想が行はれる。それはヨーロッパの哲學系統との關係を、將來に於て明白にされるべきものである。

紀元前五六百年頃、丁度リディアではクリーサスが全盛を極め、ペルシアではキロス王がナボニッスの手からバビロンを奪ひ取らうとしてゐた時分、インドには佛教の創始者が生れた。今日ネパール國境の生え繁る密林帶となつてゐるが、當時ヒマラヤ山麓のベンガルの北部に、小さな部族的共和國があつた。彼の生誕地はここである。この國は釋迦族 Sakya clan の世襲の領地で、悉多達喬答摩（シッダゴータマ） Siddhatta Gautama（*）はその一家族であつた。悉多達は名、喬答摩は姓であり、釋迦は氏族名である。族制 caste の制度は、當時インドでは充分發達を遂げるに至らなかつたから、婆羅門族は有力な特權階級ではあつたが、まだ最高の世襲族籍たる地位を贏ち得なかつた。しかし各階級の別はすでに確立して、貴族なるアリアン人と、黑色人たる庶民の間には、實際上除き得ない疎隔があつた。釋迦牟尼はアリアン貴族に屬した。その教義はアリアン道、またはアリアンの眞理と呼ばれてゐる。（* 釋迦牟尼）

佛教の經典はパーリ語 Pali（*）で書かれたものであるが、この語の研究が發達したのは、最近五十年間のことである。しかもその結果、釋迦の生涯と思想の眞相が明白となつた。從來はその傳記は怪奇な傳說に歪められ、その教義は甚しい誤解を招いた。しかし今日われわれは極めて人間的な、且つ理解し得る記述に接するに至つた。（* インド南東部に行はれた佛教語の一種。）

釋迦牟尼は容貌の秀麗な、才能に富む富裕な青年で、二十九歳の時まで、當代の普通な貴族生活を送つてゐた。ただ彼は精神生活の上では滿足することが出來なかつた。當時口傳の吠陀（ヴェダ）叙事詩を除けば、文學はなかつた。その吠陀は婆羅門が獨占してゐた。知識は甚しく低級であつた。北には雪白のヒマラヤ山脈が連なり、南は果てしない平野が展開してゐた。王の住むベナレスの都市までは百マイルもあつた。心を慰めるものは狩獵と戀愛のほかにはなかつた。釋迦は生活上のあらゆる享樂を得るに任せて味はつた。彼は十九歳の時、美しい從妹と結婚した。數年間子供がなかつた。彼は狩獵をしたり、遊戲をしたり、また庭園や、杜や、水を引いた田圃の日向道に散策を試みたりした。かうした生活の中で、彼は一大不安に襲はれた。それは考へ事を求める優秀な頭腦の持主の不幸であつた。彼はこれまで潤澤と美のまつただ中に暮らした。そして飽滿から飽滿へと轉々した。しかも彼の魂は滿足しなかつた。種族の運命が、今彼を呼びかけたのだ。彼はその暮らして來た生活が眞實の生活ではなくて、無爲の日であつたことを感じた――その無爲の日があまりに長く續いたことを感じた。

釋迦牟尼はかうした心境を益々募らせる幾つかの出來事に遭遇した。ある日遠乘の途中で、老衰した男を見

た時、彼は先づそのみすぼらしい、腰の曲つた、老ひほうけた姿に深く心を惹かれた。馭者のチャンナ Channa が言つた。「人生かくのごとし、何人もかくてあらん。」激動が消えない中に、彼はまた惡疾に苦悶する病人に逢つた。チャンナは言つた。「人生かくのごとし。」三度目に見たのは、膨れ上つた、眼のない、鳥や獸の啄み啖ふままに晒された見るも恐ろしい屍體であつた。チャンナは言つた。「人生かくのごとし。」

病と死。安定もなく滿足も得られないはかない幸福。釋迦牟尼の心は傷んだ。やがて彼とチャンナは、當時インドに多數ゐたさすらひの苦行者の一人に逢つた。これらの人々はきびしい戒律の下に、瞑想と宗教上の論議に時を費して暮らしてゐた。何となれば、釋迦以前多くの人々は、この無事泰平の太陽の燃える國で、苦難と神祕の生活を求めてゐたからである。かうした苦行者たちは、一層深い眞實の生活を探求してゐるやうにしか思はれなかつた。そこで同じことをしてみようとする熱望が、釋迦の胸の中に湧きあがつた。

傳說によれば、彼がこの計畫を考へ耽つてゐたさ中に、妻が長子を生んだといふ知らせを耳にした。「いでこの新たなる煩惱の絆を斷たん。」かう釋迦は言つた。

彼は同族たちのよろこびの最中に村にかへつて來た。この新たな絆の誕生を祝ふ大饗宴と舞妓の踊が催された。眞夜中に釋迦は「わが家が燃えてゐる知らせを受けた人のやうな」はげしい苦悶に襲はれて、目を覺ました。溜りの間では舞妓たちが暗闇と月光の縞の中に寢てゐた。彼はチャンナを呼んで、馬の用意を命じた。それから忍びやかに妻の寢所の戸口に近づくと、花に埋もれながら嬰兒を抱いて快げに睡つてゐる妻の姿が、小さな油燈の灯かげに見えた。彼は今、別れゆく前の最初であり最後であるただ一度の抱擁をわが子にあたへたいといふはげしい愛情を感じた。しかし妻が目を覺まして彼を沮止することを恐れた。たうとう彼はひきかへして、チャンナが馬を連れて待つてゐる明るいインドの月光の中にとび出した。そして馬に跨つて、ひろい世界をさして出て行つた。

チャンナと連れ立つて夜通し乘つて行く道すがら、人類の誘惑者マラ Mara が空一ぱいにひろがつて、彼を非難してゐるやうに、彼には思はれた。マラは言つた。「歸り行きて王となれ。われなんぢを王中の王たらしめん。進まばただ破滅あるのみなり。われなんぢの足跡を追ふことを止めざるべし。快樂も、怨みも、怒りも、思ひがけぬ時に遂になんぢを裏切ることあらん。なんぢいつの日かわがものとならん。」

釋迦とチャンナは夜中乘り通して、朝が來ると領地を出はづれた。そこで水の涸れた河のほとりで馬を降りた。彼は劍を執つてふさふさとした丈なす髮を切り落すと、あらゆる身の飾りをかなぐり棄てた。そしてチャンナを歸して、それらのものを馬や劍と一緒にわが家へ送り屆けた。やがてまた歩き續けるうちに、襤褸を着た男と逢つて、その者と衣服を交換した。かうして一切の俗世の煩悶を振り棄てた彼は、心のままに知識の探究に耽ることが出來るやうになつた。そこで彼は南をさして道を急いだ。目ざすところはヴィンドヤ山脈から

北方、ベンガルに走つてラジールの都市へとつづく嶮しい一支脈の山中の隱者や聖者の隱棲地である。そこでは多數の聖者たちが洞窟に住んで、時々僅かな食を求めに町に出たり、訪ねて行く人々に口うつしに知識をさづけたりしてゐた。

數世紀の後アテネで行はれたソクラテスの問答も、多分かくのごときものであつたであらう。かうして釋迦は當代のあらゆる形而上學に熟達するに至つた。しかし彼の鋭敏な理性は、與へられた解答を以てしては滿足することが出來なかつた。

力や知識は、斷食や、不眠や荒行等の極端な苦行によつて得られるものである。インド人は常にかうした信念を持つてゐた。そして今釋迦は、この思想の當否を試めさうとした。彼は五人の弟子を從へて、ヴィンドヤ山脈中の谿谷の奥深い叢林の中で、斷食と嚴しい苦行に身を委ねた。彼の名聲は「天蓋にかかる大鐘の響のやうに」ひろまつた。しかしそれが眞理に到達したしるしだとは、彼には思はれなかつた。或る日彼は衰弱しきつた身體に自ら鞭うつて、思索するために歩き廻つた。突然彼はよろめいた。そして氣を失つて倒れた。意識が恢復した時、彼は知識を求めるためのかうした半魔術的な方法が、いかに淺常識であるかをはつきりと感じた。

五人の弟子は驚き恐れた。彼が常の食を要求し、且つもはや苦行の犧牲を拒絶したからである。彼が今悟つたことは、凡そ眞理なるものは、健康な肉體に宿る榮養の多い頭腦によつて最もよく達し得られるといふことであつた。かかる思想はこの國この時代にあつては、絶對に異端であつた。弟子たちは彼を見棄てた。そして憂鬱な心を抱いてベナレスに立ち去つた。大鐘の響は鳴りを鎭めた。驚異の人釋迦の名聲は地に墜ちた。

暫くの間、釋迦はひとりで流浪した。光明への戰ひを挑む世界歴史上の最も寂しい人として。

人が複雜な大問題を解決するに當つては、一歩一歩の段階を經て、しかもその收獲は殆んど自覺しないものであるが、する中に突然光明を得て、己れの勝利を感ずるのが常である。恐らく釋迦の場合もそれであつた。食事を攝るために河岸の大樹の下に坐つた時、彼は明らさまな悟道の到達を感じた。生命の相を今こそまざまざと見たと思つた。終日終夜深い瞑想の中に坐つてから、やがて彼は、この悟道を世界にわかつために立ち上つた。

二　教義と傳說の矛盾

以上が古文書の比較研究から與へられる釋迦の傳記である。しかし俗人は安價な奇蹟や驚異を求めようとする。

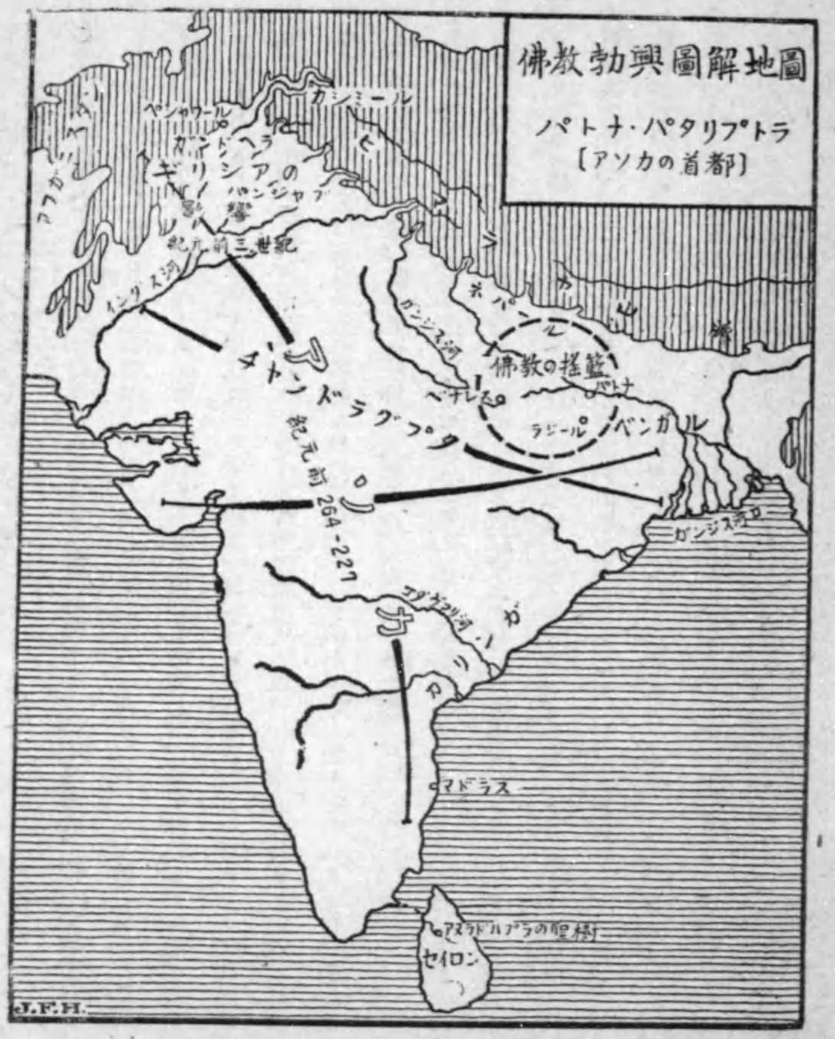
その人々には、この地球上に一人の人間が現はれて、過去や、未來や、實在の本質について瞑想したといふ

だけでは、滿足が出來ない。そこで、パーリ語の文獻にはこんなことが出て來るのである。

「世界の救濟者と魔王の間に爭鬪が始まつた。すると一千の驚くべき流星が落ちて來た……河といふ河は逆流した。太古から生え繁る樹木に蔽はれた峯や高山は地上に崩れ落ちた……太陽は隱れて恐ろしい闇となり、首のない精靈の大軍が空一ぱいに充滿した。」

かうした現象は、歷史上では何等の證跡がない。ただベナレスをさして辿つてゆく寂しい人物の影があるのみである。

一本の無花果屬の木。釋迦はその下で悟道に到達したのであるが、この木は今鄭重に保護されてゐる。これが卽ち菩提樹と呼ばれるものである。久しい以前にこの木は枯れてしまつたが、その傍にその子孫と思はれるものが生え繁つて、今では大樹となつてゐる。それからセーロン島には、世界中で最古の歷史的老樹が、今日尙生え繁つてゐる。紀元前二四五年にこの菩提樹から剪り取つた小枝を挿木したことは確かである。この時以來この木に注意深い保護と灌水が加へられて來た。その大枝は柱で支へられ、その幹の周圍には土が盛り上げられて、絕えず新らしい根を生ずるやうになつてゐる。それ以來幾百世代を數へる人間の生涯の短かさは、一本の木の齡に比べようもない。不幸にも釋迦の弟子たちは、彼の思想よりもこの木の保護に熱中した。むしろ最初から、かれ等は誤解し且つ曲解した。



ベナレスで、釋迦は今尚苦行を續けてゐる五人の弟子に逢ひに行つた。弟子たちは、彼が背教者だといふので、面會することを躊躇した。しかし釋迦の人格の力は、弟子たちの冷遇に打克つて、彼の新たな悟道に耳を傾けさせた。五日間討論が行はれた。弟子たちは始めてその悟道を理解して、彼を佛陀として迎へた。當時インドには、何十年目何百年目に慧智が地上にかへつて來て、佛陀として選まれた人を通じて人類に啓示するといふ信仰があつた。インド人の信仰によれば、かうした佛陀は何人もあつた。釋迦は新らしく現はれたその一人に過ぎなかつた。しかし釋迦自身この稱號を受け容れたか、またかうした所說を承認したか、それは疑問の餘地がある。彼の說教中では、事實自分を佛陀と稱したことはなかつた。

釋迦と復歸した弟子たちは、ベレナスの鹿野園（ろくや）に學校のやうなものを建てて、六十人の信者を集めた。雨季にはここに留まつて說法をし、雨のない季節になると、國中に巡錫して布教に努めた。布教はいづれも口傳であつた。インドにはまだ文字はなかつた。釋迦時代には、イリアッドですら文字に記されてゐたかどうか疑はしい。地中海型アルファベットはインド文字の根柢をなすものであるが、これもまだインドに入つて來なかつた。釋迦は簡潔な詩句や、格言や、要點の表を工夫して、それが弟子たちの布教に依つてひろまつた。要點や格言に番號をつけることは便利である。インド思想には物事に番號をつけて、八道とか、四諦とか呼ぶ傾向がある。しかし文字のない世界には、記憶上かうした番號つけは必要なものであつた。

三　佛陀の教義

釋迦の教義は前述のやうに、明瞭且つ單純であり、現代思想と相通ずるものである。世界が嘗て生んだ最も透徹した理智の業績たる點で、議論の餘地はない。

釋迦が五人の弟子に與へた說法は、彼の本質的な教義の根柢をなすものである。彼は言ふ。苦は利己心の所爲であり、貪慾の呵責の所爲である。一切の利己的な欲望を征服しないかぎり、人間の生活は苦難であり、その死は悲痛である。生活の欲望には三態がある。しかも三者とも邪道である。感覺を滿足させる欲望で、肉欲である。第二は不死を望む自我欲であり、第三は榮華を求める世間欲である。これらの三態は悉く克服すべきものである——換言すれば、自我の執着を滅却しなければならない——かくてはじめて生活は清澄なものとなる。これらの三態が眞に克服されて、人間の生活がもはやその支配を受けなくなると、卽ち己れなるものがその思想の中から消え失せると、はじめて至高の智慧、卽ち涅槃 Nirvana なる靈魂の清澄に到達する。涅槃については、多くの人はそれを死と曲解するが、實はさうではない。それは生活を卑賤にし、悲慘にし、悲しいものに陷れる自我の欲望の消滅を意味するものである。

ここに靈魂の平和の問題が完全に分析されてゐる。いかなる宗教も、またいかなる哲學も、苟も權威のある

ものたるかぎり、自分より大きな何物かの中に自分を消滅させることを、われわれに警告する。「生命を救はんと思ふ者はこれを失ふべし」（＊）全然同じ教へである。（＊馬太傳第十六章二五節。）

世界歴史の教訓も、佛陀のかうした教義と、嚴格に適合する。自分より大きな何物かの中に自分を消滅させることなくしては、社會の秩序も、安全も、平和も、幸福も、正義の指導も、また王道もないはずである。生物學上の進歩も、また同一の過程を取るものである。個々の經驗を持つ小さな細胞は、併合して大きな體となる。自分より大きなものの利益のために自分を忘れることは、牢獄から遁れる道である。

自己消滅は完全でなければならない。釋迦に從へば、死を恐れることは卑しくて小さな自己の生命を限りなく續けようとする貪慾であつて、エジプト人や、エジプト人に教はつた人々が、贖罪符や護符を携へて寺詣りに狂奔したと同樣、その淫慾、强慾、嫌惡の行爲に至つては、まさに不倶戴天の醜惡極まる罪業である。釋迦の宗教は不死の宗教と正しく對立する。またその教義は苦行主義とも同じやうに對立する。それは自我に苦痛をあたへることに依つて、自我の力を得ようとする策謀に過ぎないのである。

しかしながら、人間生活を汚濁する三大邪慾より解脫すべき人生の法則、卽ちアリアン道については、釋迦の教義は何も明示するところがない。それには理由がある。釋迦は歴史上の知識を缺いてゐた。空間と時間の中に湧出する生命の廣大無邊な試練について、はつきりした認識を持たなかつた。宇宙は緩漫に循環するものであつて、世界の次ぎに世界があり、佛陀の次ぎに佛陀が現はれるものであるといふ釋迦のこの恒久的な輪廻觀は、當代と當代人の思想に影響を受けたものである。人類の一大締盟を完遂しで、正義の神の擁護の下に無限の運命を開拓しようとする思想は、當時すでにバビロンでセム人の意識の中に芽生えたものであつたが、インドにはかうした思想は起らなかつた。しかも尙釋迦の八正道の思想は、かうした制限の中にありながら、深遠な知性の結晶を示すものであつた。

簡單に八正道について述べてみよう。

（一）正見。正しい主義である。さまざまな意見や觀念を嚴重に檢査して、眞理を尊重する。これを八正道中第一の主眼點とする。卑しい迷信に賴つてはならぬ。例へば、當時流行した靈魂の轉生說のごときは、排斥すべきものとする。初期佛教の有名な問答で、靈魂不滅を否定してゐる。

（二）正思惟。正しい思考である。自然は眞空を忌む。邪慾は追ひ拂はなければならぬ。そしてその跡を、他の願望――他人に對する奉仕を尊重するとか、正義を行ひ、正義をわがものとする心願とか、その他のさうした願望を以て滿たさなければならぬ。墮落以前の初期佛教は願望を排斥するものではなくて、願望の轉換を奬勵した。科學や、藝術や、物事の改善のための獻身は、佛教の正思惟に當るものであるが、かうした目的の遂行に際しては、嫉妬や名譽慾から離脫すべきことはもちろんである。

（三）正語。正しい言語。

（四）正業。正しい行爲。

（五）正命。正しい生活方法。以上の三つは説明するまでもない。

（六）正精進。正しい努力。態とらしさと、自墮落は禁じられる。行動について鋭い批判の眼を向けなければならぬ。

（七）正念。正しい臆念である。己が爲した功績、または冒さなかつた罪業について、自負傲慢に陷ることのないやう、絶えず戒心しなければならぬ。

（八）正定。正しい禪定である。これは信徒の放埒な熱狂を戒めるもので、例へばアレクサンドリアのガラガラ樂器に亂舞するやうな無分別な法悦境を排斥する。

佛教の因果應報 karma の教義は、過去の世界の思想である。あらゆる生物の善と惡の所業は、後世の幸不幸を決定する。即ち、前世の因果が、後世に應報するからであると、かういふのである。しかし、今日われわれが知つてゐるかぎりでは、生命は永遠に續く。しかしある特殊な生命が反覆するものと考へるべきではない。インド人はこれに反して、循環的回歸の思想に捉はれてゐる。何事も再び繰りかへされるものと考へてゐる。當代の人々にとつては、これは極めて自然な臆測であつて、物事をさう考へたものであるが、近代科學はかうした精確な循環が決して存在するものでないことを、われわれに明示してゐる。毎日の日は前日よりも、極めて僅かではあるが日が延びてゆく。各世界は精確に前世代を繰りかへすことはない。歴史は決して循環しない。變化は盡きるところがない。萬物は永遠に新たである。これが今日われわれの知つてゐるところのものである。しかしながら、われわれの思想と佛陀の思想とのこの差異も、基督の生誕前六世紀に、釋迦が人生解脱の律法を説いたその空前の智慧と、德性と、大度に對するわれわれの讃美敬仰を妨げるものではない。

釋迦はその教義に於て、人類の多種多様な活動力を團結させて、時間及び空間内に於ける死と消滅に反抗させることは出來なかつた。しかし彼は自己と弟子の生活を指導して、進歩的な偉業を實踐した。それは涅槃、即ち靈魂の清澄についての教義と方法を、俗世界に説法して、弘布せしめたことであつた。弟子たちにとつては、少くとも彼の教義は完全圓滿なものであつた。しかし説法や教化は誰にでも出來るものではない。教義は根本的に正しかるべき數多い人生の機能中の一つである。近代人にとつて、少くとも同じ程度に受け入れられることは、完全な自我の忘却と、靈魂の清澄の中にあつてこそ、たとへ多難ではあつても、土地を耕やし、都市を建設し、道路を開き、家屋を建て、機械を組立て、知識を求め且つひろめることが出來るといふことである。釋迦の教義は、要する同じことを説いたものである。しかるに、かうした日常生活の向上よりも退嬰的な考へ方に、教義の重點が誤つて置かれるやうになつた。

原始佛教はその點に於ても前述のあらゆる宗教と異るところがある。佛教はもともと行爲の宗教であつて、戒律や犧牲の宗教ではない。佛教は嘗て寺院を持たなかつた。從つて、犧牲を供へることもなかつたし、僧侶なる聖職もなかつた。神學も持たなかつた。當代インドに禮拜された奇怪極まる無數の神々については、その眞否を肯定もしなければ、否定もしなかつた。佛教はさうした神々を振り向くこともなく通り過ぎた。

四　佛教とアソカ王

佛教の教義は最初から誤解された。佛教の腐敗の原因は、實にその教義の中に潜んでゐたのである。當代の人々は生命の不斷の進歩的努力について考へることは出來なかつたから、自我否定の思想を、すぐに實生活否定の思想に轉嫁してしまつた。釋迦の體驗が示すやうに、俗世界から逃避することは易いが、自己を滅却することはむづかしい。初期の弟子たちは勤勉な思想家であり、說法者である。しかし單なる僧院的隱遁に陷りがちであつた。インドの氣候は、生活樣式の極端な單純化には便利でもあれば、魅力的でもあつた。それにひきかへ、仕事をするのは世界中の何處よりも苦しかつた。

釋迦は當代以後の大抵の宗教の開祖と同じやうに、知性の劣る弟子たちのために、俗世間を感銘させようとして、一の驚異として祭り上げられる運命に早くも遭遇した。前述のやうに狂信的な信徒は、教祖の悟道の瞬間宇宙に大異變が起つたやうに考へずにはゐられなかつた。これはほんの一例である。釋迦の傳記は卑俗な奇蹟で埋められてしまつた。

自我の解脫は、今も昔も、人間大衆に取つて到達し難い思想である。釋迦がベナレスから派遣した弟子の說法者の中ですら、理解し得なかつた者が多數あつたに違ひない。もちろんまた、かれ等は聽衆にそれを理解させることは出來なかつたであらう。說法が理解出來ない自我解脫から轉じて、不幸や苦惱の解脫となつたことは、極めて當然であると言はなければならない。弟子たちは一般の迷信を利用し、且つ特に死後の魂の轉生說を利用して、それが教祖の教義に悖るものであるにも拘らず、人々の恐怖心に訴へる材料とした。來世に墮落して畜生として生れ變つたり、常々婆羅門の說法者から聞かされてゐる恐ろしい地獄に墮ちたりしてはいけないからと言つて、かれ等は人々に德を積むことを勸めた。そして佛陀を無限の苛責の救ひ主に擬らへた。

支那の佛像

教祖の榮光を語らうとし、また布教の實をあげようとする正直な、しかし愚かな弟子たちの捏造した嘘は限

りがない。日常生活では嘘を嫌惡する人々も、宣傳の仕事に身を投じたら最後、無節操な詐欺師や嘘つきとなるものである。ここに人間性の錯雜した矛盾がある。かうした正直な人々は――かれ等の大多數は所詮正直な人々であつた――佛陀の誕生の時の奇蹟や、青年時代の力業や、日常生活の不思議や、また入滅に當つて佛身から發した輪光のことなどを聽衆に語りはじめた。

もちろん、釋迦が人間の父の子であるとは、信じられなかつた。母親は美しい白象を夢みて、奇蹟的に受胎したのだといふ。前世では、彼自身六本の象牙を持つた靈象であつた。そしてその象牙を悉く貧しい獵師に與へた――しかもそれを鋸で挽く手傳ひまでしたといふのである。

のみならず、釋迦について神學が出來上る。釋迦は神となる。彼は佛陀といふ神性の系統に屬するものである。全佛陀は不死の精靈であつて、過去に多數の佛陀が現はれ、未來にも多數の佛陀が現はれるはずである。しかしかうした複雜したアジア的神學については、ここで筆を擱かう。かうした病的な想像が盛んになるにつれて、釋迦の道德的教義は姿を消してしまつた。そして學說が幾つも發生し、紛糾した。臆說は更に臆說を生んだ。教祖の崇高單純な教訓は、物々しい形而上學的難解な彌撒のために、その光を覆ひかくされた。

紀元前三世紀には、佛教は富と力を得た。嘗て雨季の間に教團の說法者たちが集つた單純な小屋は、壯大な僧院建築に代つた。佛教藝術の起原は當代に發することになる。アレクサンドル大王の遠征は、當代から遙程近いことである。パンジャブ地方全部は、まだセレウコス朝の統治下にあつたし、インド中到るところに、ギリシア遠征隊の人々が入り込んでゐたばかりか、アレクサンドリアとは、陸路により、また海路によつて、交通が開けてゐた。初期佛教藝術に强烈なギリシア的性格があつたことも、セラピス神やイシス神の新アレクサンドリア式宗教が、佛教の發達上に偉大な影響を與へたことも、要するに不思議はない。

ハリティ
紀元第六世紀の支那ト
ルキスタンの佛畫

ペシャワールに近いインド北西の國境にあつて紀元前三世紀に榮えたガンダラ王國は、ギリシアとインドの文化の融合點であつた。この地は佛教最古の彫刻があるが、それがセラピス神や、イシス神や、ホールス神の像とも思はれるところがあつて、それらの佛教への影響を認めることが出來る。ガンダラに渡來したギリシアの彫刻師が、親しみ深いギリシア藝術から離れることが出來なかつたことは當然である。しかしイリス神は今やハリティ Hariti となつた。ハリティはイシス神が佛教化した慈悲深い女神である。イシス神はガンダラを中心として、支那にはひつて行つたが、もちろん他の宗教の影響があつて、複雜なものとなつた。支那には道教の神がある。天界の女王に當る聖母で、その名を觀音（本來は男性名）といふ。しかもそ

れがイシス神と酷似してゐる。日本ではクワンノンと呼ばれてゐる。こんな風に宗教の外形上には、東洋と西洋の間に絶えざる交流があつたやうである。ユーク Huc（*）の旅行記には、彼とその同伴の宣教師一行が、かうした禮拜上の共同な傳統に驚異を感じたことを記してゐる。（*第十九世中葉のフランス宣教師。支那、西藏等を旅行して見聞記を公にした。）

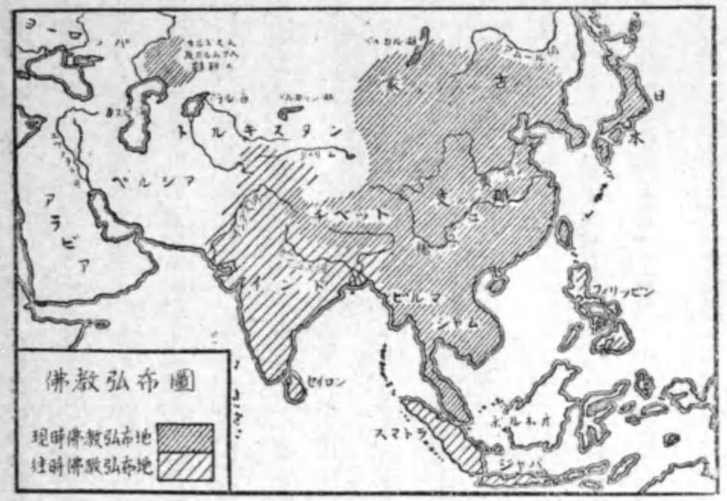
彼は言ふ。

「大喇嘛は行脚の時や寺院外の儀式の時に、十字や、僧帽や、長袍や、法衣を着る。儀式は合唱隊や、聖歌唱詠や、厄拔ひの祈禱や、それからまた、開閉自在な、五本の鎖に吊された香爐などに依つて行はれる。信者の頭の上に喇嘛僧の右手がさし延べられて、祝福が行はれる。珠數。童貞。隱遁。聖徒禮拜。行列。連禱。聖水。これらの凡てに、佛教と基督教の共通性がある。」

佛教は婆羅門教とギリシア主義のために、次第に變化を受けて腐敗しながら、紀元前四世紀と三世紀の間に多數の說法者によつてインド中に弘まつた。始めの六七十年間は、尙初期佛教の道德的な美と、單純を支へてゐた。多數の人々は自我否定や、無私無慾の意義を、理智の上から理解することは出來なかつたとしても、その實生活上の美德を擧つて尊重した。初期佛教はたしかに立派な人々を輩出した。理智の上からではなく、潛在的に、われわれに崇高な心持を起させる所以は、實にこのためである。かうした卑俗な空想と妥協したにも拘らず、佛教はよく弘まつた。それは卑俗な空想と妥協したが故に弘まつたものではない。事實初期佛教には溫和な、慈悲深い、氣高い、賞讃すべき人々が極めて多かつた。かれ等の信仰の中には信念があつた。

佛教はその發生の當初から、當時勢力のあつた婆羅門教と衝突した。この僧族は、釋迦時代に於ても、尙インドの社會生活上に支配的地位を固執してゐた。かれ等は傳統と犧牲供養の儀式を獨占して、有力な地位を占めてゐた。する中に王權が發達して、婆羅門の勢力に對抗しはじめた。族長や王となる人々は、婆羅門族以外の人々であつたからである。

王權の發達は、ペルシア人とギリシア人のパンジャブ侵入に刺戟された結果である。前述のやうに、ポールス王は象軍を用ゐて戰つたに拘らず、アレクサンドル大王に敗れて、一總督に身をおとすの餘儀なきに至つたが、偶々チャンドラグプタ・マウリャ Chandragupta Mauryaなる者が、ガンジス地方征服の計畫を抱いて、インダス河畔のギリシア軍の陣營にやつて來た。ギリシア人は、この者をサンドラコツス Sandracottus と呼んだ。マケドニア人はその上インドの奥深くはひる氣がなかつたから、この計畫を喜ばなかつた。そこでチャンドラグプタは陣營を飛び出して、北西の國境の諸部族間を流浪してゐる中に、後援者を見附けた。アレクサンドル大王が撤退した後、彼はパンヂャブを襲つて、マケドニア人を追拂つた。それからガンジス地方を征服した（紀元前三二一年）。セレウコス一世がパンヂャブの奪取を企てたが、彼はまたそれを敗つて擊退した。



そして西海岸から東海岸に亘る北インド全部の大原野に、一大帝國を建設した。かうして彼は遂に日增しに努力の增大を來たした婆羅門に對して挑戰した。バビロニアや、エジプトや、支那に起つたと同じやうな王權對僧權の鬪爭である。彼は次第に弘まつた佛教と結んで婆羅門を壓迫した。彼は佛教を支援して金を與へた。そしてその教義を奬勵した。

チャンドラグプタの後を二代目で繼いだその孫こそは、史上最大の主權者の一人として、アフガニスタンから今日のマドラスに亘る全領域を統治したアソカ王 Asoka（紀元前二六四―二二七）であつた。彼は戰勝の後に武を捨てた唯一の軍國主義の國王である。彼はマドラスの東海岸の國、カリンガを征服した（紀元前二二五年）。これがインド半島の征服の最後となつた。遠征は成功した。しかし彼は戰爭の殘虐と悲慘を見てから、急に氣が變つた。今日尙その碑銘が殘つてゐるが、彼はもう戰爭をやめて、宗教に依る征服に身を委ねるのだと言つた。そして餘生を佛教の世界弘布に捧げた。

彼はその廣大な帝國を平和に、且つ聰明に統治した。彼は單なる宗教の狂信者ではなかつた。戰爭中の一年だけ、一俗人として佛教團體に加盟したが、數年後には敬虔な教徒となつて八正道による涅槃の悟道に精進した。その生涯は、生活の方則と濟度仁慈の活動が、まつたく矛盾するものでないことを證據立ててゐる。正思惟、正精進、正命は彼の事蹟を卓越させた。彼は國中に大規模に井戸を掘らせたり、樹木を栽培させて日蔭を作らせたり、また官吏を任命して、慈善事業を起したりした。病院や、公園や、藥草園の建設も企てた。もし彼を刺戟する一人のアリストートルがあつたら、恐らく大規模に科學的研究を奬勵したことであらう。彼は原住民や隷屬民族の保護のために官職を設けた。女子教育のための施設にも當つた。また彼は一般庶民を教育して、生活の目的と方法に對する定見を與へようとした世界最初の國王であつた。佛教の布教者に大なる恩惠を施したのも彼であり、佛教經文の研究を激勵したのも彼であつた。彼は國内に釋迦の教義を記した長い銘碑を建てたが、何れも單純な、人間味のある教義を書いたもので、浚常識な誇張はない。その中で三十五基は今日尙殘存してゐる。のみならず、彼は世界中に教祖の崇高にして合理的な教義を弘めるために、カシミールや、セイロンや、セレウコス朝や、またプトレミー朝に布教師を派遣した。前述の菩提樹の小枝を携へてセイロン

島に渡つたのも、この派遣僧中の一人である。

二十八年間、アソカ王は人々への眞の奉仕のために、清く働いた。歴史を埋める幾萬の諸帝、諸王、諸公侯の中で、アソカ王の名のみはひとり星のやうに輝いてゐる。ヴォルガ河畔から遠く日本にかけて、この名は今尙ひろく尊敬されてゐる。支那や、チベットや、それからインドにすら、その教義はいつか棄てられたけれども、彼の偉名は今尙昔ながらに傳へられてゐる。嘗てコンスタンティヌス大帝や、シャールマーニュ大帝の名を口にした人よりも、更にさらに多數の人々が、今日アソカ王の名を胸に祕めてゐるはずである。

五　支那の二大聖哲

アソカ王の宏大な仁慈は、多數の狡猾不實な信徒を、その傘下に集めることとなつて、佛教の墮落を招來するに至つたことは、是非もないことである。しかしまたその一方に於て、佛教を全アジアに弘布せしめたことは、王の奬勵のたまものにほかならない。

アフガニスタンや、トルキスタンを經て、中央アジアにはひつた佛教は、やがて支那に達した。時は紀元六四年、漢朝の明帝の治世下である。梵語學者カシャパ Kasyapa が支那の布教師として渡來した後に、何人かの布教師がその後繼者となつた。布教の全盛時代は紀元第三世紀から第四世紀にかけてのことである。その後

（天眼偏）ヌシイヴ（天梵）マーラブ（天在自）アヴシ

一時苛酷な迫害を受けたが、やがて唐朝の到來となつて、再び勃興の機運を得て復興した。

佛教は支那にはひると、道教と相對することになつた。道教は早く民間に流布したもので、極めて古い原始的な魔術や、神祕的な祕法の發達したものである。漢朝時代に張道陵によつて、特種な宗教に再組織された。道教の道は、八正道の道に相當する。佛教と道教は始めの間反目し合つたが、その後相提携して弘まり、同じやうな變化を遂げて、今日ではその外形は殆んど同樣なものとなつた。佛教は一方儒教とも遭遇した。儒教は神學的色彩が少い代りに、人間の行爲の規準に重點を置くものである。更にまた佛教の遭遇したものに老子の教がある。老子は無政府主義者、進化論者、平和主義者、且つ道德哲學者でその教は宗教といふよりは生活の哲學的規準であるが、後年新道教の開祖、寇議之によつて道教と併合した。

儒教の開祖孔子は、南方の大聖哲老子や釋迦と等しく、紀元前六世

紀の人である。その生涯は紀元前五世紀と四世紀のギリシア哲學中多分に政治的色彩のあつた人々と酷似してゐる。紀元前六世紀は支那史上周朝に當るが、改令行はれずして、皇帝は傳統的な犧牲供養を踏襲するに留まり、單に形式的な尊敬を受けてゐた。その名目上の帝國の範圍も、今日の支那の六分の一ほどもなかつた。事實支那は北狄の脅威に晒された群小戰國の鼎立にあがいてゐた。孔子はかうした戰國の一つなる魯の臣民であつた。貴族の生れであつたが、家は貧しかつた。さまざまな官職に就いた後で、知職の研究と教育のために、魯に學校を設立した。彼はそれまで彼を用ゐて世界改造の中心となるべき王侯を求めながら諸國を歴訪した。二世紀後のプラトーは、同じやうな心持を懷いて、シラクサの僭主ディオニシウスの顧問として仕へた。アリトルとイソクラテスのマケドニア國王フィリップに對する關係も、これと同じであつた。

孔子の教は、標準的な、または理想的な貴族に見るやうな崇高な生活に到達することを理想とするものにほかならない。かうした成句を英語では、往々優れた人柄 Superior Person と譯されてゐる。ただ「優れた」とか「人柄」とかいふ言葉は、「卑しからぬ」とか「上品な」とかいふ言葉と同樣、半ば諷刺的に濫用されてゐる。所詮儒教にあてはまる譯語ではない。孔子は忠實な公人の理想を當代に示したのである。彼に取つて公生活は、極めて重要なものであつた。彼は釋迦や老子以上に建設的な政治思想家であつた。支那の國勢について、深甚な考察を拂つてゐた彼は、至高の國家を產み出すために、多數の貴族的な人物の出現を要望したのである。彼の言葉の中に、かういふ一節がある。

「世界から隱遁して、われわれと關係のない鳥や動物と交はることは不可能である。自分は惱む人々以外の誰と言葉を交へよう。この盛んな無秩序の世相こそは、自分の努力を要するものである。もしも公正な規準が國を統治するならば、自分はその狀態を變へようとするものではない。」

孔子の教の政治的基礎には、支那の特質的な道德的觀念が反映してゐる。支那の道德や宗教は、インドやヨーロッパに比べて、多分に國家的觀念が强い。孔子は一時魯國の一都市、成都の市長を奉職した。當時彼は生活に極度の調整を施行し、あらゆる親戚關係と行動を統制して、精密な禮法の規準を制定した。詳しく言へば、彼は宮廷や豪族の家庭にのみ適するやうな儀禮を事每に定めて、一般庶民の日常生活に、その嚴格な律令を强制した。かうして食事に於ても、階級の別によつて規定があり、街路の通行にも男女の別を制定した。のみならず、棺の厚さ、墓の形や位置まで、統制に從はなければならなかつた。

これは人が言ふやうに、たしかに支那風である。禮法に依つて道德的秩序と、社會的安寧を招來させようとした國民は、事實支那人以外にはない。兎に角、孔子の教は支那に於て素晴らしい効果を齎らした。今日かうした儀禮と克己の傳統を持續してゐる點で、支那人は世界中唯一の國民である。

その後孔子は魯公の信望を失つたので、彼は隱退して、再び私生活にはひつた。その晩年は彼が望をかけて

ガネサ（象頭神）　カリ（黒天女）　クリシナ神

ゐた弟子の幾人かの死に遭遇したことから憂鬱であつた。彼はは言つた。

「自分を師と仰ぐ明君は現はれない。自分にとつても、今や死ぬべき時である……」

しかしながら、孔子は死んで生きたのである。彼は支那國民性の發達に影響を與へた點で、歴代の諸帝を一括したよりも遙かに優つてゐる。從つて彼は支那史上最も重要な人物の一人である。抑々また孔子がかほどまでに國民に影響を及ぼした所以のものは、彼の人格によるといふよりは、むしろ支那國民の特質に因るのである。もしも彼が支那以外の國に生れたとしたら、その名は恐らくすでに忘れられたことであらう。彼がこの人格を完成し、且つ人生に對するその識見を獲得するに至つたのは、祖先以來教養を受けて來た道德哲學の諸文献を熱心に研究した結果にほかならない。もちろん、孔子が說いたものは、支那國民にとつて決して新說ではなかつた。それは彼が古文書の研究中に、過去の聖哲の幽かな聲を聞いて、古代國民の精神的發達から歸納した諸說を國民に傳へるための擴聲器となつたものに過ぎない。孔子の人格が支那の國民生活に與へた絕大な影響は、その著述や、他人によつて書かれた彼の教によるばかりでなく、實に彼の行爲そのものに原因する。彼の弟子たちや、後世の人々によつて書かれた彼の人格は、中にはまつたく傳說的なものもあるが、幾百萬人の模範となつた。しかもその幾百萬の人々は、偉人の外形の模倣にのみ墮した。

老子は周朝の帝室圖書館に永く奉職した人であるが、その教は孔子の教よりも神祕的で、漠とした、捕捉しがたいものである。彼は快樂や世俗的な權勢に對するストア哲學的な無關心を主張して、過去の空想的な單純生活へ歸ることを說いた。その殘した著述は、文體頗る簡潔を極め、意味は甚だ晦澁で、謎のやうである。彼の死後、その教は釋迦の教義と同樣墮落して、種々の傳說を生じ、複雜異樣な儀禮や迷信思想によつて歪めれた。しかし孔子の教はこれほどに歪められてゐない。それは平易直截で、かうした曲解的餘地がなかつたからである。

佛教と、老子の道教と、儒教を、支那では三教と呼んでゐる。この三つが合して、爾後の支那思想の根柢、且つ出發點となつてゐる。東西兩洋の國民の智的道德的締結に資するためには、三教の徹底的な研究を必要とする。

三教の中での最も偉大で深遠なものは、佛教である。今日までその教義は、多數の人類を支配してゐる。兎に角、この三教はやがて西洋に發達する思想及び感情と對照をなすものである。第一にこれらの三教は人格的な、寛容の教義であり、態度の、八正道の、高潔な教義である。それは教會の教義でもなければ、一般的な戒の教義でもない。同時にまた、神々の存在と禮拜に對して、肯定も否定もするものではない。アテネの哲學者たちが、神學上の問題に對して、無關心な態度を取つたのと、同じことである。事實ソクラテスは、すべての偶像神を禮拜して、几帳面に犧牲を供へたのだ——自分の思想を損ふことなしに。

ユダヤや、エジプトや、バビロニアのユダヤ人は、かうした無關心な態度に對立して斷然反對の位置に立つものである。かれ等に取つて、神はただ唯一つであり、最初のものであつた。釋迦や、老子や、孔子には更にその片影をだに認められないものが、ユダヤ教に存在する。それは嫉妬深い神の觀念である。この神は己れのほかに、一切の他の神を許すことがない。恐ろしい眞理の神。魔法や、巫術や、古い慣習を信じたり、神人王に犧牲を供へたり、また萬物の嚴かな統一性を冒瀆したりすることを寛容することのない神。

六　佛教の墮落

ユダヤ人の不寛容は、本質的な信仰を明瞭に、また純潔に保つ上に力があつた。しかし東洋の三大教が、肯定も否定もしない神學的無關心は、最初から複雜な註釋と繁雜な儀禮を助長するに過ぎなかつた。釋迦の正見は無視されがちではあつたが、兎に角この正見を除けば、佛教も、道教も、儒教も、自己清淨の要素を缺いてゐた。迷信的な慣習や、交靈術や、呪文や、平身低頭や、その他さまざまの禮拜を禁ずる嚴法がなかつた。從つて最初から虛禮が起つて、それが續いた。新宗教はかうして取り除かうとした既成宗教の病弊に感染した。そして偶像や、寺院や、祭壇や、香爐をそのまま繼承した。

チベットは今日佛教國である。しかし釋迦が地上に歸つて、チベットの隅から隅まで探すとしても、彼自身の教義を見出すことは出來ないはずである。最も古風な統治者、ダライ喇嘛が「生き佛」として祭り上げられてゐる。ラサには僧侶や、院僧長や、喇嘛僧で埋まつてゐる尨大な寺院がある。——釋迦の建てたものは草葺小屋に過ぎなかつたし、僧侶は一人もなかつたのに——そして高い祭壇の上には、巨大な金色の偶像が安置されて、それが釋迦自身であるとは！　本尊の前では節をつけた勤行の聲が聞える。幽かに聞き覺えのある教訓の言葉が、呟くやうにそれに答へてゐる。鐘の音。燒香。跪坐。すべてがただ豪華を極める儀式である。勤行中に鐘が鳴つて、鏡が上る。會衆一同は敬虔の發作の中で恭しく頭を下げる……

その周圍に見出されるものは、幾つかの珍らしい小さなからくりである。小さな風車と水車が廻つてゐる。それに短い經文が記されてゐる。それが一廻りすると、一回の祈願となる。一體誰に祈るのであらう。のみな

らず、そこここに無數の旗竿が立つて、絹の小旗がひらめいてゐる。旗には「蓮の中に寶あり」の譯のわからない語句が記されてゐる。この旗が讃へるごとに、また一回の祈願となる。そしてこの旗に金を出した人と、國中一般に利益があるものとされてゐる。信心深い人に傭はれた勞働者の群が、あちらこちらで、斷崖や岩石にこの尊い語句を刻んでゐる。これが釋迦の作つた宗教のこの俗世に於ける成れの果である！　靈魂の清澄を期すべき八正道は、この卑俗なけばけばしさの中に空しく埋められてゐるのだ。

原始佛教には進歩的思想が缺けてゐた。この點でもユダヤ教と對照をなしてゐる。ユダヤ教に與へられた神約の思想は、その以前の、また同時代の他の宗教に認めることが出來ない。それはユダヤ教を歴史的な、また戯曲的なものにした。ユダヤ教の嚴格な不寛容には、畢竟ある目標がある。釋迦の教義は、心理的に眞理と深遠なものがあるに拘らず、佛教が墮落して腐敗したのは、指導的觀念を缺いてゐたからである。ユダヤ教は初期に於て、人々の魂に觸れることはなかつた。淫樂にも、貪慾にも、世俗的な嗜好にも、また迷信にも、人々の爲すがままに任せてゐた。しかし、神約を强調して、神聖な目的に奉仕する神の指導を力説したためにばかり佛教と比較して、希望を未來に繫ぐ秋水のごとき名刀の冴えを思はせるのである。

七　現在の佛教

インドでも佛教は暫くの間榮えた。しかし多數の神と多種多樣の儀式のある婆羅門教が平行して榮え、やがてその勢力が斷然優勢となるに至つて、族制否定の佛教をインドから逐放した。その爭鬪史には迫害があり、反動があつた。そして第十一世紀には、オリッサを除いて、全インドから佛教が消滅した。ただ佛教の溫和と慈悲の教義が、婆羅門教の中に多分に取り入れられた。

今日尙佛教は、世界の廣大な地域に亘つて殘存してゐる。多分また釋迦の本來の教義が、西洋の科學と接觸し、歴史精神に刺戟されて、復興と淨化の日が到來するかぎり、人類の運命の指導の上に大なる役割を演ずることであらう。

しかし、八正道がインドから消えるとともに、アリアン民族の生活の支配力を失つた。かうしてアリアン人の一大宗教は、今では獨占的に蒙古民族の宗教となつた。一方アリアン民族は、本質的にはセム民族のものたる基督教とイスラム教の二宗教の支配下にある。のみならず、佛教も、道教も、また基督教も、その儀式と、信條は、ともに寺院と僧侶の國、エジプトから、且つ褐色人ハム民族の精神能力から、ギリシアの海峽を通つて由來したものである。

昭和十六年四月十日印刷
昭和十六年四月十五日發行

譯者檢印

世界大文化史（1）
定價四圓

譯者　鈴木善太郎

發行者　東京市神田區美土代町一
中村德二郎

印刷者　東京市牛込區山吹町一九八
萩原芳雄

發行所　東京市神田區美土代町一
白揚社
振替東京二五四〇〇
電話神田二二八五

萩原印刷所印行

世界大文化史

—第二卷—

H・G・ウエルズ著　鈴木善太郎譯

世界大文化史は第二卷に於て、ローマ帝國の興隆と倒壞から、基督教と回教が生命の復興にいかに影響しだかを述べ、更にアジア世界に於ける匈奴の活躍と、漢唐兩朝の繁榮を仔細に考察する。中世こそは西歐の萎縮時代であり、東洋諸民族の全盛時代である。蒙古禍に脅かされたヨーロッパ諸民族の恐怖と惱苦に、人類劇の興味は高潮する。現代を知るためには、現代文化の母胎たる中世の姿を把握しなければならぬ。

第二卷內容概目——第五篇ローマ帝國の興隆と倒壞（西方の二共和國、グラックスから神人皇帝へ、海と大平原の間のローマ皇帝）第六篇基督教と回教（基督教の勃興と西ローマ帝國の崩壞、第七世紀のアジア、マホメットと回教、基督教と十字軍）第七篇陸路の蒙古諸帝國と海路の新興諸帝國（成吉思汗大帝國、西歐文化の復興）

世界大文化史

—第三卷—

H・G・ウエルズ著　鈴木善太郎譯

悠久たる時の流れは、世界大文化史第三卷に於て、急速なテムポを取る。舊思想の破壞。あらゆる事物の「近代的」な自覺。武力競爭の白熱。列强の僞瞞外交の破綻。かうして機械革命から第一次大戰に至つて、人類は幻想の破滅を痛感しなければならなかつた。しかも世界の未來は畢竟絕望に終るべきものか。否。生命は不斷に始まる。常に新しく生れるために死んでゆく生命は、永遠に若く、且つ熾烈に、星の世界をめざして進むことを暗示する。

第三卷內容概目——第八篇列强時代（諸侯・議會・列强、新民共和政治、ナポレオンの功業、第十八世紀の現實と空想〔機械革命と產業革命の關係、アジアに於けるインドの判決例、日本の歷史〕近代帝國主義の悲劇的結末〔第一次大戰の直接的原因、一九一七年までの大戰の概要、ロシヤの崩壞から休戰まで〕大戰後の世界〔ヴェルサイユ會議、國際聯盟、支那の動亂、將來の人類の展望〕）

909
105

終